川崎医学会事始め

平野　寛

川崎医学会が発足して以来やがて満20年を迎え，その機関誌は本年で第20巻を数える．

川崎医学会設立へ向けての胎動は，まず機関誌発行の準備から始まった．すなわち，1974年7月10日に紀要発行準備委員会が開かれ，その討議結果に基づいて同年10月8日には第1回紀要編集委員会が，ついで第2回委員会が12月25日に開催されて基本方針が確立した．川崎医学会誌の創刊号が発行されたのは1975年4月30日のことであった．

一方，川崎医学会の設立準備は具体的には医学会設立準備委員会委員の選任（1974年11月27日）に始まったといってよい．同委員会は1975年1月13日に第1回が，ついで2月26日には第2回が開催され，諸準備の整った1975年3月12日に設立総会が挙行されて，ここに川崎医学会が正式に発足した．

当時の関係者の苦労をしのんでその努力に敬意を表するとともに，川崎医学会の今後の発展を心から願うものである．

（平成6年5月16日採用）

Foundation of Kawasaki Medical Society

Yutaka Hirano

Kawasaki Medical Society was founded in 1975. The twentieth volumes of KAWASAKI IGAKKAI SHI and Kawasaki Medical Journal are being published in this year.

In this article, process of foundation of the Society is described. I pay my respects to the related members for efforts in past days and wish that the Society will develop more and more. (Accepted on May 16, 1994) *Kawasaki Igakkaishi 20 Suppl : 3—8, 1994*

Key Words ① **Kawasaki Medical Society** ② **KAWASAKI IGAKKAI SHI** ③ **Kawasaki Medical Journal**

はじめに

川崎医学会（以下，「本医学会」）が設立総会を開いて正式に発足したのは1975年3月12日であったから，明年で満20年を迎えることになる．この間，初年度の7月23日から本年3月31日をもって川崎医科大学を定年退任するまでの約18年半にわたって，筆者は庶務担当理事として役員の末席を務めさせていただいた．

一方，本医学会の和文機関誌である川崎医学会誌の創刊号は1975年4月30日付で発行されて

川崎医療福祉大学 医療福祉学部医療福祉学科
（川崎医科大学名誉教授）
〒701-01 倉敷市松島288

Department of Medical Social Work, Faculty of Medical Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare (Professor Emeritus, Kawasaki Medical School): 288 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-01 Japan

おり，本年は第20巻が刊行される年にあたることから，編集委員会ではmini-reviewを記念特集として編集することを企画され，筆者にも執筆するようご依頼をいただいた．そこで，編集委員会のご指示に従って，本医学会の設立にいたるまでの経緯を中心に，記憶をたどりながら，また手許にある資料を参考にして，概略を記すことにしたい．

本医学会設立へ向けての胎動

教授会議事録を読み返してみると，本医学会に関連した記録が始めて教授会の議題として表われるのは，1974年5月8日に開催された昭和49年度第3回教授会での議題4．〝川崎学園紀要の発行準備について〟である．1974年といえば，その前年に附属病院が完成し，臨床関係の教員が松島の地に移って12月17日から診療を開始した翌年であり，現在の形態での教授会が開催されるようになって間のない頃のことである．

この教授会で，水野祥太郎学長（当時）が大学の紀要を発刊するための準備を始めたいとして意見を求められた．それに対して，発刊の時期，名称，形態，編集方針などについて種々の発言があったが，特に大学の母体となった川崎病院との関係が論じられた．実は，それまでに川崎病院でも「川崎病院医学雑誌（Medical Journal of Kawasaki Hospital)」が刊行されており（1968年2月5日創刊，1974年3月30日第5巻第1号発行），中川定明教授（人体病理学，当時）が編集主幹を務めておられたこともあって，それとの関係が問題として取り上げられたわけである．結局，当日はそれらの問題点を検討するための委員会を設置することで決着し，委員の人選は学長に一任された．

紀要発行準備委員会の開催

この第3回教授会での承認事項を受けた形で，第4回教授会（5月22日開催）で紀要発行準備委員会委員候補者7名が提案され，承認された．

7月10日，水野学長，松本邦夫副学長(当時)および委員7名全員出席のもとに紀要発行準備委員会が開催され，編集方針を中心に討議が行われた結果，以後は編集委員会を設けてその会で紀要発刊へ向けての具体的な計画を推進することになった．また，以下の事項が確認されている．①編集委員会の委員には準備委員会委員がそのまま移行し，それに副学長が加わる，②学長が委員長を務める，③委員の任期は2年とし，再任を妨げない，④掲載論文は欧文を主とするが和文でもよい，⑤発行回数は当分の間少なくとも3カ月に1回とする，⑥創刊号は11月末日〆切，明年2月印刷，3月発行を目途とする，⑦機関誌の名称の決定は後日に譲る．

かくして，紀要発行に関する作業は紀要発行準備委員会から紀要編集委員会へ引き継がれることになった．紀要編集委員会の構成を**Table 1**に示す．

Table 1. Members of editorial committee of official publication

委員長	水野祥太郎学長
委　員	松本邦夫副学長
〃	柴田　進副学長
〃	川﨑明徳副学長
〃（教養関係）	川口四郎教授（生物）
〃（　〃　）	仮谷太一教授（数学）
〃（基礎関係）	木本哲夫教授（実験病理学）
〃（　〃　）	村山好道教授（薬理学）
〃（臨床関係）	中川定明教授（人体病理学）
〃（　〃　）	荒木淑郎教授（内科・神経）
〃（　〃　）	高折益彦教授（麻酔学）

投稿論文の募集

一方で，紀要発刊のための具体的な作業，特に投稿論文の募集が開始されることになり，各部門（教室）で投稿準備可能な論文数についてあらかじめアンケート調査が行われた．7月17日に開かれた第8回教授会の議事録によれば，その時点で準備できるとの回答の寄せられた論文数は和文37篇，欧文21篇と記されている．この教授会で紀要編集委員会を設置すること，委員には副学長と紀要発行準備委員会委員全員を委嘱することが教授会として承認され，編集委員会が正式に発足する運びとなった．

9月27日付で編集委員会から各部門所属長あてに，投稿論文作成の進行状況を10月10日までに回答するようにとの文書が配布され，引き続き10月3日には学長名で回答の〆切を10月7日に繰り上げるとの指示が出されている．そして，当日現在和文9篇，欧文6篇が11月末日脱稿予定であることも附記されており，当時の並々ならぬ意気込みが伝わってくるようである．

紀要編集委員会の活動

第1回紀要編集委員会は10月8日に開かれ，紀要の名称を和文篇は「川崎医学会誌」に，欧文篇は「Kawasaki Medical Journal」にすることが決められた．次いで創刊号の編集に関連して，その日までに和文21篇，欧文7篇の申し出のあったことが報告され，従って早急に投稿規定を定める必要があるとして，提出された〝「川崎医学会誌」投稿てびき〟をもとに「川崎医学会誌」投稿規定（案）〟がまとめられた．また，〝「川崎医学会誌」発行計画（案）〟も同時に検討されたが，その際，懸案となっていた「川崎病院医学雑誌」との関連について論議され，直ちに両者の統合を考えることなく，同誌の推移を見守ることで合意されている．なお，この委員会で始めて川崎医学会を速やかに設立することが必要であるとの合意のもとに〝川崎医学会会規（案）〟が資料として提示されている点が注目される．これら3案のうち〝「川崎医学会誌」投稿規定（案）〟と〝「川崎医学会誌」発行計画（案）〟とは，若干の手直しのうえ10月16日開催の第12回教授会で示され，それらに対する意見を紀要編集委員会まで申し出るよう要望された．

12月25日に第2回委員会が開催され，以下の事項が討議された．①川崎医学会誌について：中川委員から20篇集まっているとの報告があり，それに対して具体的作業に取り掛かるよう要望された，② Kawasaki Medical Journal について：柴田委員から15篇集まっていること，これらを3号に分けて出版する予定であることが報告されて了承された，③教養関係特別号について：教養関係教員に研究成果を発表する機会を与えるために毎年1冊の特別号を出版することとし，1975年度末までに第1号を出してはとの提案があり，全員一致で承認された（筆者 注：一般教養篇第1号は1976年3月25日に発行されている），④出版方針について：継続性を重視すること，特別号は年1冊とすること，がそれぞれ確認された，⑤表紙について：至急に教員から募集することで了承された，⑥印刷所の指定について：早く刷り上がることに重点を置いて選定し，決定後はできるだけ変更しないことが合意された，⑦川崎医学会の設立総会について：早急に準備委員会を開き，役員の選考，会費の検討などに着手することの必要性が強調された，⑧川崎医学会の会費について：年会費は7,000円ぐらいが適当ではないか，それに関連して松本委員から，教室費から2,000円程度負担できるかどうか検討したいとの発言があった（筆者 注：検討の結果それが不可能であることが後日報告されている）．

医学会設立準備委員会による最終調整

医学会設立について始めて教授会で議題として取り上げられたのは，1974年7月3日に開催された昭和49年度第7回教授会においてであった．従って，時期的には紀要発行準備の方が先

Table 2. Members of preparatory committee for foundation of Kawasaki Medical Society

学　長	水野祥太郎
副学長	松本邦夫，柴田　進，川崎明德
教　授	木原　彊（内科・消化器II），佐野開三（外科・消化器），大森弘之（泌尿器科），上田　智（内科・検査），大倉卓治（解剖・組織），岡田博匡（生理学），日下喬史（生化学），望月義夫（衛生学）
助教授	植木宏明（皮膚科），難波正義（実験病理学）
教　授（川崎病院）	山本覚次（眼科），田中良憲（産婦人科）

行していたことになる．この席上，水野学長の求めに応じて多くの教員から医学会を設立するか否かについて意見が述べられたが，結局当日は継続審議とすることで終わっている．その後7月17日の第8回教授会での討議を経て，10月16日開催の第12回教授会で始めて設立することが決定され，医学会設立準備委員会を設置すること，委員の選考については学長・副学長に一任することで合意された．なお，さきに紀要編集委員会で作成された〝川崎医学会会規（案）〟が同時に資料として提示され，検討するよう要請された．

その後暫くは学長の海外出張によって中断されていたが，学長の帰国をまって11月27日に開かれた第15回教授会で医学会設立準備委員会委員が **Table 2** のとおり決定された（筆者 注：川崎病院からの2名は，教授会当日は未定で，後日追加されたものである）．

実際に第1回委員会が開催されたのは，年が改まった1975年1月13日のことであった．この会で次の3項目が討議のうえ合意されている．①会員について：川崎医科大学教員，川崎医療短期大学教員，川崎医科大学附属病院レジデント全員，特に入会を希望し所属部門責任者の推薦を受けて理事会で承認されたもの，②会費について：大学の教養・基礎関係助手以下およびレジデントは3,000円，講師以上は5,000円，③役員について：評議員―教授会出席者，理事―10名（会長1名，副会長3名，臨床部門2名，基礎部門2名，教養部門1名，短大1名），監事―2名，幹事―理事会から依頼，④集会について：設立総会を1975年2月26日，午後挙行（筆者 注：後日，3月12日に変更された），第1回学術集会を3月早々に開催（筆者 注：第1回川崎医学会講演会は1975年5月14日に開かれ，本年3月16日現在で62回を数える）．

第2回委員会が設立総会に予定されていた2月26日に開かれ，役員候補者の選出と設立総会までの手順とが話し合われた．まず役員については，会長は学長，副会長は副学長とし，理事に関しては学長指命の選出委員（臨床関係5名，基礎関係5名，教養関係3名）によって選出された候補者が全員了承された．当日は短大からの選出については改めて決定することになった．ついで監事に日下喬史教授（生化学，当時）と高田和郎教授（物理）とが選出された．設立総会までの手順に関しては，3月3日午後4時から設立準備委員会および役員候補者の合同会議を開き，3月12日午後3時から設立総会を開催するという段取りが決定された．

3月3日の合同会議では，〝川崎医学会会規（案）〟と設立総会とが議題として取り上げられ，前者は若干の手直しののち〝川崎医学会会則（案）〟として3月5日開催の昭和49年度第21回教授会に提出され，設立総会までに意見があれば申し出るよう学長から要望された．

かくして川崎医学会設立総会の準備はすべて整い，3月12日を待つのみとなった．3月7日には学長から川崎医科大学教員，川崎医療短期大学教員および川崎医科大学附属病院レジデント全員にあてて〝川崎医学会の発足にあたって〟と題する案内状が送付された．

Table 3. Officers of Kawasaki Medical Society at beginning

会　長	水野祥太郎学長
副会長	松本邦夫・柴田　進・川崎明徳副学長
理　事	
臨床部門	小川重男教授（産婦人科），寺尾章助教授（内科・神経）
基礎部門	木本哲夫教授（実験病理学），小野義三助教授（微生物学）
教養部門	仮谷太一教授（数学）
短　大	佐々木匡秀教授（臨床検査科主任）
監　事	日下喬史教授（生化学），高田和郎教授（物理）

川崎医学会設立総会の挙行

設立総会は1975年３月12日午後３時から校舎棟708番教室において開催された．

まず水野学長ならびに川崎祐宣理事長(当時)から挨拶と祝辞が述べられ，ついで水野学長が座長に選出されて次の４議題が審議ののち可決された．①会則について：前述の〝川崎医学会会則（案）〟が逐条審議され，会員に関して川崎病院の教員でない医師ならびにレジデントの取り扱いを中心に質疑が行われた．また，役員に関する条文中字句の一部が訂正されたのちに承認され，当日付をもって〝川崎医学会会則〟が施行されることになった，②役員について：会則に基づく会長および副会長以外の役員について，すでに記した経緯で設立準備委員会で選出された役員候補者全員が承認された，川崎医学会発足当初の役員を **Table 3** に示す．③学術集会の運行について：まず昭和48年度プロジェクト研究の報告から始めることが決定された，④学術雑誌の発行について：和文誌と欧文誌の２本建とし，１年にそれぞれ４冊，別に教養特別号１冊の発行を予定して作業中であるとの現状報告があり，了承された．

設立総会では議事終了後，竹脇　潔教授（生物，当時）による〝出生直後雄性ホルモン投与を受けたネズミの子宮について〟と題する学術講演が行われ，盛会のうちに会を終了した．

翌３月13日には〝川崎医学会設立について〟との標記で会長通達が配布され，川崎医学会が正式に発足したことが告示されるとともに，〝川崎医学会会則〟と〝「川崎医学会誌」投稿てびき〟とが会員に届けられた．ここに川崎医学会はその第一歩を踏み出した．

川崎医学会の発足から第１回役員改選まで

設立総会後間のない３月22日，役員会ならびに編集委員会の合同会議が開かれ，役員の業務分担が編集―木本理事，集会―寺尾理事，会計―仮谷理事，庶務―小野理事と決まった．またこの合同会議で，定期的学術集会を５月から開始することが確認され，それに基づいて第１回川崎医学会講演会が５月14日に開催されたのは前述のとおりである．７月23日の第２回合同委員会で小川理事が編集担当に選任され，あわせて図書館長が庶務担当理事として追加された．これを機に，国内・外の学外関連施設との会誌交換業務および学会誌残部の保管を図書館が担当することになった．

1976年12月８日，発足後初の総会が開催され，会則の第１回改正（入会手続きおよび会員特典停止に関する条項の追加）と，昭和50年度会計とが議題として取り上げられた．次の総会は1977年７月13日に開かれたが，この総会がその後今日までの総会の在り方のひな型になったものと思われる．この総会では，医学会事務担当部門を大学事務部に置く条項を追加した会則改正，昭和51年度決算・昭和52年度予算とともに，任期満了に伴う役員の改選が議題として審議された．役員については，未だ基礎固めの時期にあるとして現役員全員の再任が満場一致で決定された（但し，雑誌担当であった村山会誌編集委員の転出に伴い斎藤泰一教授（薬理学）を後任に選任）．併せて本学同窓会会員の中から

1名を理事に加えることが承認された.

おわりに

川崎医学会発足前後についてその概略を記した.その後の経過を述べるのは本拙文の目的ではないが,今顧みて,歴代の役員各位の献身的な努力にもかかわらず,幾つかの事例を挙げるならば本学卒業生全員が会員になることをうたった会則と現実との間のギャップ,海外からの研修者の受け入れや会員の転出・復帰にかかわる会員資格認定上の問題,経費節減のための方略,学会誌発行の遅れなど,今日なお解決を迫られている課題は少なくない.それらの多くは役員の努力不足によるものではない.例えば,卒業生には本医学会への理解と積極的貢献が望まれるし,学会誌発行の遅れは投稿者の心掛け次第で大いに改善されるはずであり,それがまた無駄な経費の節減にもつながることを,長年裏方として庶務を担当させていただいた筆者の,本医学会の今後の発展を願っての苦言として指摘しておきたい.

それにつけても,準備段階から今日に至るまで,本来の業務に加えて本医学会のために並々ならぬ努力を重ねてこられた関係各位に心からの敬意を表する.作業が地味であるだけに体験者でなければ容易には理解できないであろう.川崎医学会が会員すべての強い愛着と支援を得て,今後ますます発展することを衷心より願うものである.